

保育学生の体育授業を考える

——鉄棒の歴史と授業実践から——

高橋 裕勝・永井 理恵子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】 本稿は、保育者養成校における、保育学生の体育授業を考える研究の第二弾である。運動遊び指導に対する意識が高い保育者は、運動能力に自信があるという報告がある。保育者養成校において体育実技を担当する筆者の実感としては、運動能力に自信のない保育学生は少なくない。体育関連授業のなかで、何をどのように学習するのかについては、十分な検討が必要である。そこで本研究では、授業に関する事前調査より得られた学生の自由記述回答および学生の授業ノートの記述を分析し、受講学生全体の特徴や課題を見出すことを目的とする。なお、今回は、鉄棒の授業実践を研究対象とし、巨視的な観点から鉄棒の歴史についての整理もおこなう。

【方法】 鉄棒の歴史は、器械運動としての鉄棒の誕生と日本への導入について、先行研究の成果を基に整理した。授業実践は、事前調査より得られた学生の自由記述回答および学生の授業ノートの記述をKH Coder 3を用いて分析し、質的な解釈を行った。

【結果】 鉄棒の歴史は、欧州における器械運動の誕生と拡大ならびに器械運動の日本への導入と展開の概観から整理できた。授業実践は、事前調査より、1) 補助具を用いた逆上がりの練習、2) 鉄棒が苦手な子の遊び、3) 鉄棒が得意な子の遊び、4) 授業に対する希望を見出すことができた。学生の授業ノートの記述より、1) 逆上がりのコツと難しさ、2) 子どもの指導、3) 鉄棒が得意な学生の気づき、4) 独自性のある気づきを見出すことができた。

【考察】 古来、遊びとして楽しみの要素が強い活動であった鉄棒運動は、やがて中等教育における身体訓練として本格的に教育に導入され、そののち遊びから訓練を繋ぐ期間も段階的に学校教育においておこなわれるようになってきた。授業実践は、事前調査より、授業内容に対象学生の生の声を反映することができた。授業ノートの記述より、第一弾と同様に、授業者が授業中に直接観察できなかった学生の気づいたことや感じたことについて、受講学生全体の特徴や課題を見出すことができた。特に多くの学生が逆上がりの練習方法に関心を寄せており、運動の類似性について考える機会となった。今後の課題として三つあげることができる。一つ目は、1950年代以降の学習指導要領の中で鉄棒がどのように扱われてきたのかを整理すること、二つ目は、授業に関する事前調査を鉄棒以外の運動種目でも実施すること、三つ目は、各運動種目の技能向上に繋がる類似性のある運動を整理することである。

【キーワード】 保育学生、体育、授業ノート、事前調査、運動の類似性、器械運動としての鉄棒

I. 問題の所在と目的

1. はじめに

本稿は、保育者養成校における、保育学生の体育授業を考える研究の第二弾である。第一弾¹⁾のここでは、1966年以降2016年までに7回実施された幼児の運動能力に関する全国規模の調査報告²⁾を整理した上で、保育学生の体力・運

動能力調査に関する先行研究を把握した、川上・増田・竹内(2017)をもとに、現代の保育学生の体力・運動能力の懸念について触れた³⁾。

現職保育者の幼児への運動遊び指導に関する最近の研究を見ると、飯田・黒田・松本(2021)は、運動遊び指導に対する意識が高い保育者は、運動能力に自信があることを明らかにしている⁴⁾。保育者養成校において体育実技を担当する筆者

の実感としては、運動能力に自信のない保育学生は少なくない。体育関連授業のなかで、何のように学習するのかについては、十分な検討が必要である。

そこで、本研究では、鉄棒の授業に焦点を当て、第一弾の縄跳びと同様に授業ノートの記述をテキストマイニングの手法を用いて分析し、受講学生全体の特徴や課題を見出すことを目的とする。

ところで鉄棒は、幼稚園や保育所、学校体育でも広く認められた活動であるが、その歴史的な背景についての論考は少ない。巨視的な観点から、まずは、鉄棒の歴史について整理する。

2. 「器械運動」としての鉄棒の歴史

日本における運動器具「鉄棒」は今日、学校の校庭、幼稚園・保育所の園庭はもちろん、公園や児童遊園など至るところで目にすることができる。その高さも幼児向きのものから児童・生徒向きの高鉄棒と呼ばれるものまで様々ある⁵⁾。日本の児童・生徒は公教育における「体育」の授業で鉄棒を使用した遊びや運動を習うほか、休み時間に児童・生徒は主体的にこれで遊ぶ。幼児も園や地域において鉄棒で遊ぶ。

このように、日本人にとって大変に身近であり、今日では経験したことのない人はいない「鉄棒」を使用した運動であるが、いくつかの先行研究を見ると、これを学校の授業で導入するのはなかなか難しいものであるとされているようである⁶⁾。その理由を総合的に整理してみると、個人スポーツであり一人ひとりの技術に応じた指導が必要であること、鉄棒を使った動きそのものが日常生活からはかけ離れていること、得手・不得手の差が出やすいため苦手な子どもに興味を持たせるのが難しいこと、身体が重くなる前にどのくらい経験したことがあるかが技術に圧倒的な差を生んでしまい一定程度成長してから上達するのが難しいこと、運動技術に専門性が求められるため一般の学校教員自身の技術に限界があって演示するのが困難であり時に教員よりも生徒のほうが上手だったりすること、等々枚挙にいとまがなく、一般的にはあまり前向きにとらえられてないような印象がある。

現在、「鉄棒」の指導は、「小学校学習指導要領 体育科」では「器械運動」系に含まれていることが確認できる⁷⁾。一方、「鉄棒」は現在、

競技スポーツとしては「体操」競技のなかで、男子は床運動・あん馬・吊り輪・跳馬・平行棒に鉄棒を加えた6種目が、女子はあん馬・平均台・床運動に段違い平行棒を加えた4種目がおこなわれていて、男子・女子ともに「鉄棒」系の種目を確認することができる。

それでは、「器械運動」としての「鉄棒」の誕生と日本への導入について、先行研究の成果に学んでみよう。

(1) 欧州における「器械運動」の誕生と拡大

体育学の研究者である岡端隆は論文「学校体育における器械運動の特性に関する一考察」(1995)において、以下のように述べている。そもそも体操とは運動経過そのものではなく運動を行った結果として健全な身体の育成を目指すことを目的とした運動である一方、器械運動は運動経過そのものが目的であり、そのできばえを判断・評価するものであるという⁸⁾。つまり、器械を用いた体操と、器械を用いた運動の両方があり、「器械体操」という表現は正確ではないと丘端は述べ、「鉄棒」は「器械体操」ではなく「器械運動」に分類されるとしている。

「鉄棒」を含む「器械運動」の起源は、広く「ドイツ体操の父」と呼ばれているヤーン(Friedrich L. Jahn, 1778~1852)が、ナポレオン支配下にあったドイツ国民の士気を高め少年を鍛えるため、ベルリン郊外に野外体操場を作ったことに端を発する⁹⁾。ここでは、木馬、平行棒、水平棒などを用いた器械運動がおこなわれていたと、体育学研究者の三橋綾子は述べている¹⁰⁾が、NHK for School収録の動画「体育雑学1(鉄棒の歴史)」によれば当時はいわゆる回転技などはなく、足のつかない程度の高鉄棒にぶら下がるのが主流の技術であったという。材質も「鉄」ではなく木製の棒であったことが、同番組掲載の古い絵から判断できる。

その後「鉄棒」はドイツ国内に留まらず広くヨーロッパに拡大していき、1881年には現在の国際体操連盟(FIG:Federation International de Gymnastics)の母体が結成、1896年の第一回アテネ・オリンピックの正式種目として採用された5種目のなかの一つに「鉄棒」も加えられた(男子種目;あん馬・吊り輪・跳馬・平行棒・鉄棒)と三橋は述べている¹¹⁾。

以上は「器械運動」としての「鉄棒」の起源

であるが、そもそも西洋において「棒」を用いておこなわれた子どもの遊びの絵のなかに、その一例を確認することができる¹²⁾。様々な研究で多用されるブリューゲル (Pieter Bruegel, 1525?-1569) 著『子供の遊戯』(Kinderspelen, 1560) の油彩画では、その絵の上部に、木製の棒で遊ぶ二人の子どもの姿を確認することができる。二人はそれぞれ、いわゆる「ぶたの丸焼き」と「易しい回転」(いずれも文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編』平成30年2月発行, 第2章 体育科の目標および内容 第2節 各学年の目標および内容 第1学年および第2学年 B 器械・器具を使った運動遊び (1) 知識および技能 ウ鉄棒を使った運動遊び p.47 に記載されている動き) をして遊んでおり、棒を使った遊びもこの程度であれば「遊び」の一部として子どもたちに楽しまれていたことがうかがえる。

以上、見てきたように、一定の高さに横向きに設えられた棒でおこなう運動は、容易なものであれば子どもの遊びのなかに自然と発生したことが確認できる一方、鉄棒が国民鍛錬のための一つ的手段として導入された器械運動になった時点においてその本質が大きく変容したことが想定できよう。

(2) 「器械運動」の日本への導入と展開の概観

こうしてドイツで誕生した器械運動, 「鉄棒」運動は、どのようにして日本に入ってきたのだろうか。これについて複数の先行研究から要約してみたい。

・近世以前

笹川スポーツ財団ホームページ記事によると、日本では武士, 民衆それぞれの身分によってスポーツの原点といわれるような活動をしていたという¹³⁾。武士は流鏝馬, 笠懸, 巻き狩りなどを武芸の一貫としておこない, 民衆は石合戦, 相撲, 鬼ごっこ, 綱引きなどをしてきたとされている。また, 先に参考としたNHK for School 動画「体育雑学2(日本の鉄棒の歴史)」によれば, 葛飾北斎著(1760-1849)『北斎漫画八編』(1818)に, 竹竿にぶら下がり遊ぶ姿が描かれていると述べられているので, 確認したところ以下のような絵図の所収を見ることができた¹⁴⁾。



Figure 1. 竹竿にぶら下がり遊ぶ姿
『北斎漫画八編』(1818)より

・明治前～中期

そうした背景のうえで近代スポーツの導入は, 三橋によれば, 1830(天保元)年頃, 高島秋帆(1798-1866)なる人物が長崎藩の新兵訓練として導入, そののちに日本軍においても新兵訓練の一貫として導入されたという¹⁵⁾。三橋によれば器械体操は, 「入隊後の訓練期間が惜しいと, 学校教育にも器械体操が採用されるようになった」¹⁶⁾とされている。同じく三橋によると, そもそも木棒であったものに鉄芯が入れられたのは1850年ごろで, 折れやすいのを防ぐために考案されたとのことであるが, たとえ鉄芯が入れてあっても表の木が摩耗して結局は中の鉄芯が出てくるため, 木を無くして鉄芯のみになったという¹⁷⁾。その後は改良が重ねられ, 一般に学校などに設置されるタイプのものから体操競技に向くものまで, 今日では多様な鉄棒が見られるようになった。

1872(明治7)年に「学制」によって学校教育の燭光を迎えると1876(明治11)年には体操伝習所が設立され, 米国人リーランド(George

A.Leland, 1850-1924) を招聘して学校体育の基礎の確立が目指された。当初おこなわれた運動は手具を用いた体操が中心とされ、「軽体操」「普通体操」などと呼ばれていた¹⁸⁾。その後、1882(明治17)年に英国から帰国した森有礼は「当時の文明開化の風潮に疑問を抱き」¹⁹⁾、個人としてではなく国民として人民を育成することを重視して、結果として体育も武道ではなく兵式体操に意味を見出す。結果として二年後の1884(明治19)年に発布された「中学校令」では「普通体操」に併せて「兵式体操」も課せられた。『近代日本学校体育史』には、1886(明治21)年8月の「尋常師範学校設備準則」の一部が掲載されており、そこに「鉄棒 一基」の記述を確認することができ、この時期の尋常師範学校には「鉄棒」が必ず設置されていたことが確かめられる²⁰⁾。

中学校での「鉄棒」導入の一方、小学校の体操科においては、中学校の「普通体操」「兵式体操」に加え、「遊戯」や「戸外運動」への関心も高まっていた。明治中期の小学校で実践されていた遊戯には「蝶々」「風車」「民草」などが確認され(白浜・志之目共著『遊戯法』(明治27年)²¹⁾、当時の幼稚園教育における「遊戯」と同一の遊戯がおこなわれていたことが確認できる。こののちには「唱歌遊戯」も加えられ、当時の小学校における体操科は中学校におけるそれよりも、どちらかという幼稚園における「遊戯」に近接していたものと考えられる。

・明治後期

やがて日清戦争を終えた日本の学校教育における体育は保健衛生に関する内容も注目されたと同時に、小学校・中学校のいずれにおいても各種の法規が整備され、体育の内容も更に整理されていったと竹之下らは述べている²²⁾。竹之下らは、1902(明治35)年の「中等学校教授要目」によって「我が国最初の体操要目が萌芽的に発表された」²³⁾と述べ、その内容を示しているが、各種の体操が列記されているなか「器械体操」は第三学年において初めて登場し、第四～五学年にも記載があることが確認できる。ここで明らかなことは、「器械体操」は明治期においては中学校、しかも第三学年以上の高学年になって登場するものであり、それ以前の年齢においては学校では正式な体操科目として設定さ

れていなかったということである。また、同要目には「教授上ノ注意」十二において「教授用備品ハ次ノ例ニ依ルヘシ」として挙げた備品のなかに「鉄棒」の表記が確認できることから²⁴⁾、「器械体操」として「鉄棒」がおこなわれていたことも想定範囲内とすることができよう。

・大正期

大正期における「鉄棒」の実施について確認すると、「学校体操教授要目」(文部省訓令第十号)(1913(大正2)年(前要目)および1926(大正15)年(改正要目))において「懸垂」の項目を見ることができる。この要目は小学校、高等女学校、中学校、師範学校の全てにおける体操教材と種類(体操、教練、遊戯、撃剣及柔術)を示したもので、前要目では10番目に、改正要目では5番目に「懸垂」が示されている。「懸垂運動」について先の竹之下らは、姿勢形成に重点をおく第一懸垂と、技術的なものを中心とした第二懸垂とに分けており²⁵⁾、教材としては一般に肋木や横木を使用し、男子の技能的教材(当時「ドイツ式」と呼ばれていたと竹之下らは述べている)にのみ「鉄棒」が使用されたとしている²⁶⁾。実際に「改正学校体操教授要目」を確認すると、「第五 懸垂運動」にその内容が一覧できるようになっており、「器械」としては「肋木」「横木」「鉄棒」の3種が記載されていて、全25の「運動」のうち「鉄棒」を使用するとされている「運動」は「懸垂(逆手)(片逆手)(両側)」「懸垂横行」「懸垂半(全)屈臀」「脚蹴上」「逆上(サカアガリ)」「屈臀振上」「蹴上(ケアガリ)」「懸垂振上」「蹴上脚懸上」「巴蹴上」「俯下(フシオリ)」「後下」の全12「運動」である。ここに、大正末期になって「鉄棒」を用いた運動種目があったことを確りと認めることができる。

・昭和初期

大正期の日本教育界は一般にアメリカ新教育運動の影響を強く受けていたが、竹之下らによれば「この教育運動の発生地(ママ)アメリカ自体が、体育に関する限り、やっとな形式主義を脱却しはじめた段階」²⁷⁾であり、わが国では「自学主義の体育がなかなか具体化しなかった」²⁸⁾という。そのため、昭和初期における日本の学校体育は上記の「改正学校体操教授要目」(1926)

を継続使用し、1937（昭和12）年には「青年学校体操科教授要目」が示されたが、その時点で既に日本は戦局に向かう状況となっており、竹之下らはこの状況を「スポーツに漂う自由主義的要素が酷しく批判され、武道は教育国策の第一線に現れた」²⁹⁾と述べている。この頃から1945年に向けての日本の学校体育の状況は、本稿においては割愛する。

・昭和戦後期

前掲『近代日本学校体育史』は昭和戦後期について、体育科に留まらず教育全般について総括したうえで、戦後の学習指導要領について紹介している。1946（昭和21）年にアメリカ教育使節団が来日し報告書が発表された。これを受けて1947（昭和22）年には「学校体育指導要綱」の原案が作成されたと同時に「教育基本法」「学校教育法」が公布され、6・3制の実施と男女共学制が明治された。1949（昭和24）年には「学習指導要領小学校体育科篇」が示され、1952（昭和27）年には「学習指導要領中等学校体育科篇」も示された。「小学校篇」では「第二章 教材の解説とその指導」第八節 教材の解説とその指導の六に「器械遊び・器械運動」の項目が設置され、そのなかに「鉄棒」もマット・すべり台・ブランコなどと併記して明記された。

具体的な内容については学年ごとに分かれて示されている。「第九節 第一・二学年の教材例」における項目には「鉄棒を利用していろいろな運動をして遊ぶ。」としたうえで、以下の内容が示された。

1. 懸垂して振る
2. 振ってうしろへおる。
3. とび上がる。
4. よじのぼる。
5. 前へまわっておりる。
6. 両手の間から両足を入れてうしろへまわっておりる。

7. 片足をかけて上がったたり回ったりする。」³⁰⁾なお、用具は「低鉄棒」とされている。「第十節 第三・四学年の教材例」における項目は、以下のように示されている。

1. 棒登り
2. 懸垂とび上がり
3. 足かけ上がり
4. さか上がり

5. 足かけまわり
6. 腕立てまわり
7. とび上がりおり
8. とび越し
9. 前まわり
10. 横まわり」³¹⁾

これらのなかには鉄棒を用いた運動以外のものも含まれている。鉄棒運動の用具としては「低鉄棒」と示されている。

続いて「第十一節 第五・六学年の教材例」を見ると、「四・器械運動」には以下の項目が挙げられている。

1. 綱登り
2. 足かけまわり
3. 腕立てまわり
4. 振りとび
5. け上がり
6. とび上がりおり
7. 腕立てとび越し
8. 倒立
9. 前回り
10. 横回り
11. うしろ回り」³²⁾

これらにも鉄棒以外の項目も含まれている。用具については「低鉄棒」とされているものの、「け上り」の解説には「肩ぐらいの高さの鉄棒」と記載されており、我々が一般に「低鉄棒」と言われてイメージする高さよりも高いのではないかと思われる。この高さの鉄棒で「け上り」をするためには勢いだけではなく上腕二頭筋の筋力は勿論、全身運動の調和が求められ、容易な運動ではないことが想定できる。

上記のように、敗戦後に策定された「学習指導要領」では小学校においても段階的に多様な鉄棒運動を導入することが示されており、日本の学校体育において低年齢の児童期から本格的に「鉄棒」を取り入れるようになったことが確認できる。

洋の東西を問わず、最初は横木にぶら下がる、簡単に回るなどの「遊び」として楽しみの要素が強い活動であった「鉄棒」運動は、やがて中等教育における身体訓練として本格的に教育に導入され、そののち「遊び」から「訓練」を繋ぐ期間も段階的に学校教育においておこなわれるようになってきたのであった。

本稿では文書および法に示された「鉄棒」の

確認に留まったが、近代以降の学校教育場面における実際についても別途、考察を試みたい。
(永井理恵子)

II. 方法

1. 調査対象

(1) 対象とした授業

調査対象とした授業は、本学本科2年次前期科目「体育実技」である。体育実技は、基礎教育科目であり、幼稚園教諭2種免許ならびに保育士資格取得の必修科目でもある。シラバスでは、授業の概要を「様々な運動の実践を通して、幼児期から生涯にわたる健康の維持・増進に関わる知識・技能について学ぶ。仲間と共に活動する中で、コミュニケーションの方法を学ぶ」と説明している。

特徴は、毎回の授業後に授業内容と気づいたことや感じたことを授業ノートへ記録することを課題としている点である。なお、授業者は、筆者（高橋裕勝）である。

(2) 対象とした学生

本学こども教育学科に在籍し、体育実技を受講する30名を調査対象とした。対象学生は、幼稚園教諭2種免許ならびに保育士資格の両方、又はどちらか一つの資格取得を目指している。

2. 調査の内容と時期

調査の内容は、体育実技で実施した「鉄棒」の授業実践である。

まず、2022年6月中旬に「鉄棒で遊んだ思い出や授業に対する希望」を自由記述にて調査した（以下、調査1とする）。

調査1の結果をもとに、授業内容を考案し、同年7月初旬に鉄棒の授業を実施した。

その後、同年7月末に提出された授業ノートから、鉄棒の授業における「気づいたことや感じたこと」についての記述を調査した（以下、調査2とする）。なお、授業内容についての記述と挿絵は、調査の対象外とした。

3. 倫理的配慮

学生に研究の目的と意義、データの収集方法、個人情報保護、人権保護および安全管理、イン

フォームドコンセントについて、口頭と文書で説明し、書面で同意を得た。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

4. 分析方法

調査1、調査2から得られたデータは、Excel形式のファイルに変換し、テキストマイニングの手法を用いて分析する。IT用語辞典 e-Words によると「テキストマイニングとは、定型化されていない文字情報の集まりを自然言語解析などの手法を用いて解析し、何らかの有用な知見を見つけ出すこと」³³⁾と説明している。

本研究では、テキストマイニングソフトである KH Coder 3 を使用し「計量テキスト分析では、人間が文章を目で読み、質的に解釈することを決して否定していない。むしろ、計量的な分析の結果を参考にして、もとの文章の質的な解釈をおこなうという方法である」³⁴⁾ という樋口 (2017) の方針に沿って、次の手順で分析をすすめる。

(1) コマンド「前処理の実行」から、データベーススタツを把握する。

(2) コマンド「抽出語リスト」から、抽出された語の出現数を把握する。

(3) コマンド「共起ネットワーク」から、抽出されたサブグラフより、語と語の繋がりや出現パターンの似通った語のグループを把握する。

(4) コマンド「KWIC コンコーダンス」から、もとの文章を辿り、出現数の多い抽出語がどのような文脈で用いられているのかを把握する。

III. 結果

1. 調査1

調査対象者30名のデータを用いて、KH Coder3により分析した。「前処理の実行」から、得られたデータベーススタツは、総抽出語数（使用）：1534（546）、異なり語数（使用）：340（226）、文ケース数：100であった。

Table 1は、「抽出語リスト」の結果から、出現数4以上の抽出語（25語）と出現数を示している。出現数が最も多い「できる」は、全ての活用形を含めて抽出しているため、「できない」などの語を含んでいる（調査2も同様）。また、「小学生」と「小学校」は、同義で用いられている場合は「小学校」に統一した。

Table 1. 抽出語と出現数（調査1）

抽出語	出現数	抽出語	出現数
できる	36	挑戦	7
鉄棒	32	ぶら下がる	6
逆上がり	31	幼稚園	6
小学校	16	ぶたのまるやき	5
前回り	12	回る	5
補助	10	使う	5
今	9	遊ぶ	5
子	9	かける	4
友達	9	座る	4
苦手	8	授業	4
公園	8	少し	4
高い	8	片足	4
練習	8		

なお、「逆上がり」「前回り」「ぶたのまるやき」の3語は、強制抽出する語の指定を行った。

Figure 2は、「共起ネットワーク」で抽出された抽出語からなる共起ネットワークであり四つのサブグラフが検出された。抽出語間の線は、強い共起関係ほど濃い線で表され、円は、抽出語の出現数に比例して大きく表されている。なお、集計単位は文、出現数による語の取捨選択は、最小出現数を4、共起関係の描画数は30とし、サブグラフ検出の手法は、random walks を選択した。

2. 調査2

調査対象者は、30名であるが、授業ノートに分析の対象となる記述がない者5名と欠席者2名のため、23名のデータを用いてKH Coder 3により分析した。

「前処理の実行」から、得られたデータベーススタツは、総抽出語数（使用）：1942（724）、異なり語数（使用）：412（302）、文ケース数：70であった。

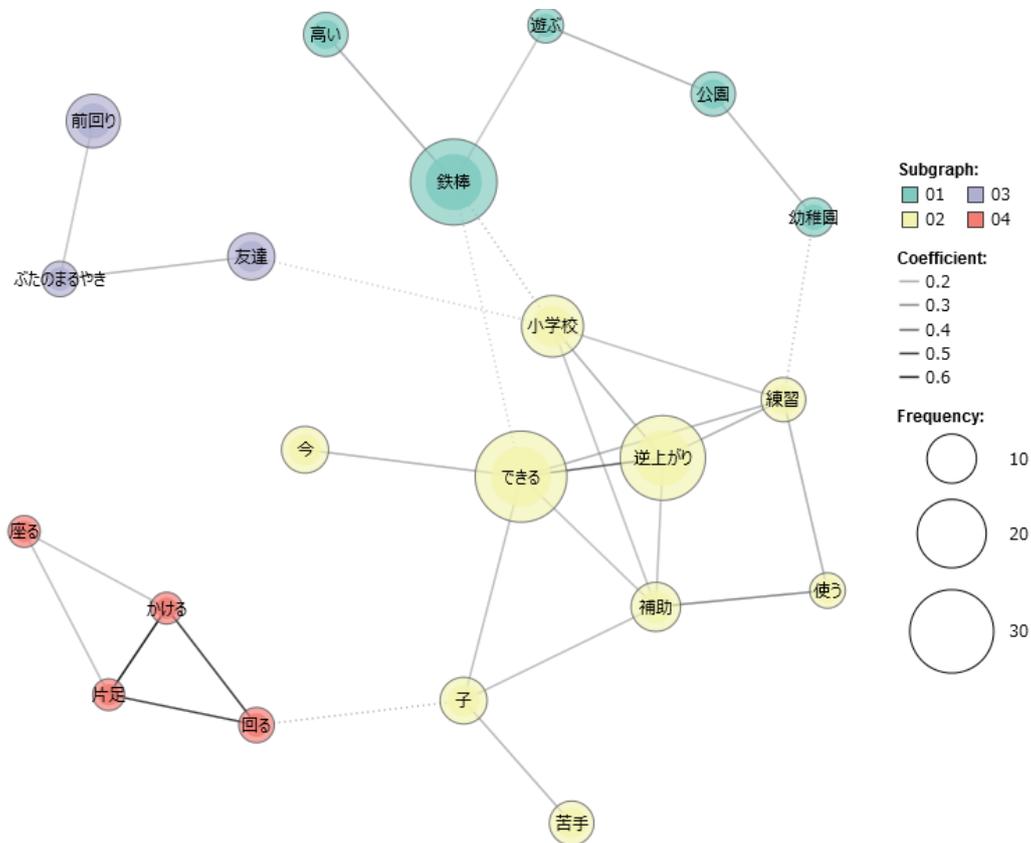


Figure 2. 抽出語からなる共起ネットワーク（調査1）

Table 2 は、「抽出語リスト」の結果から、出現数 4 以上の抽出語 (37 語) と出現数を示している。なお、「逆上がり」「前回り」「つばめ」「ふとん」の 4 語は、強制抽出する語の指定を行った。

Figure 3 は、「共起ネットワーク」で描出された抽出語からなる共起ネットワークであり、五つのサブグラフが検出された。抽出語間の線は、強い共起関係ほど濃い線で表され、円は、抽出語の出現数に比例して大きく表されている。なお、集計単位は文、出現数による語の取捨選択は、最小出現数を 4、共起関係の描画数は 40 とし、サブグラフ検出の手法は、random walks を選択した。

Table 2. 抽出語と出現数 (調査 2)

抽出語	出現数	抽出語	出現数
できる	33	前回り	6
鉄棒	31	挑戦	6
思う	25	動き	6
逆上がり	22	安全	5
子ども	15	感覚	5
つばめ	11	使う	5
ふとん	11	自分	5
感じる	11	身体	5
大切	11	知る	5
回る	9	痛い	5
行う	8	保育	5
足	8	理解	5
久しぶり	7	学ぶ	4
少し	7	恐怖	4
前	7	見る	4
補助	7	今回	4
練習	7	分かる	4
コツ	6	腕	4
教える	6		

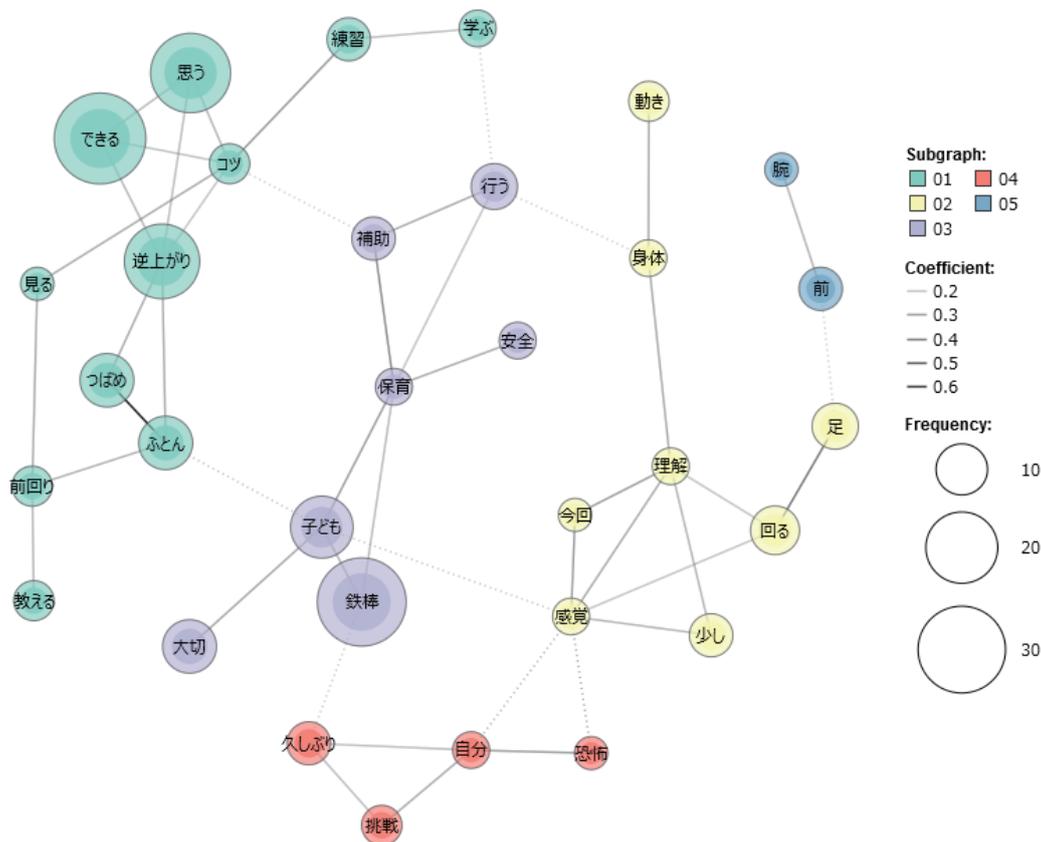


Figure 3. 抽出語からなる共起ネットワーク (調査 2)

IV. 考察

本稿では、出現数の多い抽出語を含むサブグラフや筆者が特徴的だと判断したサブグラフに注目し、「KWIC コンコーダンス」から、各サブグラフの抽出語が、学生の記述のなかで、どのような文脈で用いられたのかを探り考察する。

なお、学生の記述内にある下線部は、抽出語であり、() は、2-1、8-2を除き、必要に応じて、筆者が補足したものである。

また、これ以後の鉄棒の技の名称および技の特徴等については、小学校学習指導要領解説体育編（平成20年6月）³⁵⁾ および小学校学習指導要領解説体育編（平成29年7月）³⁶⁾ ならびに菊池（1981）³⁷⁾ を参考にした。

1. 鉄棒で遊んだ思い出や授業に対する希望（調査1）

サブグラフ02は、「できる」「逆上がり」「小学校」「補助」「今」「子」「苦手」「練習」「使う」の抽出語から構成されている（Figure 2）。このグラフは、出現数の多い抽出語を複数含むことから、対象者の全体的な特徴を表すものと考えられる。

「逆上がり」と「できる」は、大きな円で表されているとともに、両者の共起関係は、濃い線で繋がりが、グラフの中核を成している。鉄棒で遊んだ思い出という問いに対し、多くの学生が「逆上がりができるかできないか」について述べ、さらに他の思い出に触れていた。

「逆上がり」のほかの遊びは、サブグラフ03の「前回り」「ぶたのまるやき」、サブグラフ04の「座る」がある（Figure 2）。また、サブグラフ04の「回る」「片足」「かける」は、「後方片膝掛け回転」と思われる記述から抽出されている。

以上のことから、サブグラフ02、サブグラフ03およびサブグラフ04を中心に分析したところ、次の四つの特徴がみられた。

(1) 補助具を用いた逆上がりの練習

対象学生が小学校時代に扱われていた小学校学習指導要領解説体育編（平成20年6月）では、「逆上がり」は、第5学年および第6学年の上がり技として例示され³⁸⁾、「補助逆上がり」は、第3学年および第4学年の基本的な上がり技として

例示されている³⁹⁾。

「補助逆上がり」は、「逆上がり」に発展する技として「補助具を用いた易しい条件のもとで、脚の振り上げとともに上体を後方へ倒し、手首を返して鉄棒に上がる」と説明されている⁴⁰⁾。

このような背景もあり、補助具を用いた逆上がりの練習に関する記述が多くみられたことは、自然なことともいえる（学生の記述1-1、1-2、1-3、2-2、2-3）。

補助具を用いた練習のほかには、1-4の鉄棒の握り方に関する記述「手を(の)握る向きを上にしたり下にしたたり」があった。一般的な握り方である順手と、その反対の握り方である逆手を交互に試しながら練習した様子が読み取れる。このほかに、逆上がりの練習に関する直接的な記述は、見当たらなかった。

学生の記述 1-1

逆上がりができなくてよく練習していました。今はできるかどうかわからないです。小学校の頃は、逆上がりができない子に向けた補助する板みたいなので、鉄棒と自分の身体につける補助器具みたいなのを付けてやっていました。

学生の記述 1-2

小学校の時、逆上がりの補助を使って練習していく（うち）に段々とできるようになって得意になったこと。できない子の補助をしたり、教えてあげたりしたこと。（後略）

学生の記述 1-3

逆上がりの補助を使って小学校の授業をした。近所の友達と公園で前回り、こうもり、ぶたのまるやきをした。

学生の記述 1-4

逆上がりができるように頑張った。手を(の)握る向きを上にしたり下にしたたり、上と下など変えて逆上がりをした。やったのが前のことすぎて今もできるかわからないです。

(2) 鉄棒が苦手な子の遊び

学生の記述2-1にある「前回り」は、鉄棒に上り、身体を伸ばして前方に傾け、腕を伸ばして身体を支えた姿勢「正面腕立懸垂姿勢」から、

上体を前に倒し、ゆっくり前に回り、着地する技である。正しくは、「前回り下り」という。「前回り（は）怖い」とあるが、この技は、安定した「正面腕立懸垂姿勢」や逆さ感覚が身についていないと難しい。

学生の記述 2-2 にある「ぶたのまるやき」は、両手両脚支持の「逆さ懸垂姿勢」のことである。この遊びは、左右の手を少しずらした拜手で鉄棒を握るため、安心感を持って動き出すことができる。また、上体がほぼ地面と平行になるため、逆さ感覚を育む最初の遊びとしても適している。

学生の記述 2-2, 2-3 にある「座る」は、「背面腕立懸垂姿勢」に近いものと思われる。鉄棒に腰掛け、身体をまっすぐにし、脚を斜め前方に伸ばした姿勢である。「腰かけ腕立懸垂姿勢」ともいう。

「座る」という表現から、実際には、膝を曲げた状態でバランスをとっていると思われる。

学生の記述 2-3 にある「片足だけかけて回る」は、「後方片膝掛け回転」と思われる。「後方片膝掛け回転」は、前後開脚の支持姿勢から後方へ上体と後ろ足を大きく振り出し片膝を掛けて回転し、手首を返しながらか前後開脚の支持姿勢に戻る技である。両手で鉄棒を握り、片脚を掛けてぶら下がる「片脚（膝）かけ逆さ懸垂姿勢」を身につけた上で、片脚を鉄棒に掛けて、反対の脚を振る「片脚掛け振り」などへと少しずつ難易度を上げて習得していく技である。

学生の記述 2-1

ぶら下がることは何度かした思い出はあるが、前回り等は昔に少しした覚えしかないです。自分に合う高さが中々ないです。前回り（は）怖い。

学生の記述 2-2

設置されている逆上がり用の板を使って練習していた。お腹に当たるのが痛すぎて苦手だった。今も苦手です。ぶら下がる（膝裏を引っかけ、ぶたのまるやき）、棒に座るのは好き。

学生の記述 2-3

逆上がりが補助台ありでもできなくて、2番目くらいに嫌いだった。友達と一緒に座っ

て話をすることが多かった。片足だけかけて回るのも全然できなかった。

(3) 鉄棒が得意な子の遊び

鉄棒が得意な学生の記述は、独自性があり、具体的に述べられていた。学生の記述 3-1 には、「鉄棒はだいたいできると思う」「学童のバイトで子どもと公園に際に鉄棒で遊んでいる」とあり、現在も自信を持って子どもと関わっている様子が読み取れる。

学生の記述 3-2 は、幼稚園から小学校にかけて、自分や友達がどのような鉄棒の遊びを経てきたのかが述べられている。逆上がりは、幼稚園年長の頃から挑戦を始め、補助なしでできた時の達成感も記憶されている。

学生の記述 3-3 は、「目玉焼き」という遊びや「10秒間に7回の逆上がりをする」という難易度の高い遊びや中学校時代の記憶も述べられている。いずれも友達と一緒に楽しんだ経験として記憶されている。

学生の記述 3-1

小学校の時に6個くらい鉄棒があり、全く高さが違って段々高くなっていくものでそれで遊んでいた。1番高い鉄棒はジャンプしても届かなかったので、ポールを登って棒をつかんだり友達と協力して棒をつかんでいた。鉄棒はだいたいできると思う。今は学童のバイトで子どもと公園に行った際に鉄棒で遊んでいる。

学生の記述 3-2

年少・年中では鉄棒にぶら下がったりして遊んでいました。年長らへんで前回りや逆上がりに挑戦していました。小学校になると、片足をかけて回ったり、連続で回っていたり、プロペラに挑戦している子もいました。逆上がりでは、足で登れる補助してくれるものを利用して挑戦してみて、このように身体を動かしてやればいいんだと気づくことができたり、補助なしで挑戦してみて初めはできなかったことも何度も挑戦して、できるようになった時に喜びと達成感を感じることもできました。

学生の記述 3-3

小学校の時に目玉焼きという遊びを友達としました。1番高い鉄棒を使い、下に円を書いて円の中に落ちないように反対側に移動する遊びでした。勢いが必要だけど、友達とするのが楽しかったです。小学校で10秒間に7回逆上がりをするると特級賞がもらえる仕組みがあり、友達と何回も挑戦しました。中学校の部活で鉄棒でぶら下がるトレーニングをしたり、1番高いところでふざけて逆上がりをしたりしていました。

(4) 授業に対する希望

学生の記述4-1には、「逆上りを何度練習してもできなかつた」思い出が述べられている。自分の苦い経験が、鉄棒が苦手な子どもの指導への関心に繋がっているようである。

学生の記述4-2は、冒頭に「鉄棒も苦手です」とあり、鉄棒の他にも苦手な運動があることがわかる。膝のけがや落下した経験から、「怖かった」「危険だ」とも述べている。何かの技ができるかどうかよりも、安全な鉄棒運動へ関心が向いている。

学生の記述4-3は、過去に一度だけできた逆上りの経験が述べられている。偶然にできた経験は、「いつでもできる」に繋がる重要なものであるが、時間が経ち過ぎている。逆上がりができるようになるためには、新たに運動感覚を耕す必要がある。

学生の記述4-4は、過去には自信を持ってできた逆上がりができなくなった事実から「復活させたい」と述べている。できたことができなくなることは、自分の身体を見直す機会にもなる。

学生の記述 4-1

鉄棒は苦手です。逆上がりを何度練習してもできなかつた思い出があります。鉄棒が苦手な子への援助、配慮や苦手な子でもできることを知りたいです。

学生の記述 4-2

鉄棒も苦手です。小学校の時、技の名前は忘れてしまったのですが、片足を鉄棒にかけて回る練習をした時、膝の裏を怪我して落ちました。怖かったです。鉄棒は危険だという事はわかっていますが、少しでも安全なやり

方を教えてください。

学生の記述 4-3

逆上がりを今までに1回しかできたことがないので、できるようになりたいです。小学校の時、授業で鉄棒をした時に1回だけできました。(後略)

学生の記述 4-4

鉄棒は、小中学生の頃は得意な方として授業中の見本として呼ばれたり、高鉄で何でも回ることが可能だったりしていたのですが、つい先日、友人と公園にあった明らかに小さい子用の鉄棒で、逆上がりすらできませんでした。だいぶ悲しかったです。(中略) 逆上がりくらいは復活させたいです。

2. 授業内容の考案

調査1の「鉄棒で遊んだ思い出」は、小学校時代の逆上りの経験に関する記述が多く見られた。また「授業に対する希望」は、子どもへの援助や配慮および安全な方法についてのニーズがあった。

そこで今回は、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編の低学年にある「鉄棒を使った運動遊び」⁴¹⁾ および中・高学年にある「鉄棒運動」^{42), 43)} ならびに吉田・三木(1996)⁴⁴⁾ および菊池(1981)⁴⁵⁾ を参考にして、「逆上がり」を中心教材として、以下の内容ですすめることにした。

(1) 安全な鉄棒運動

- 鉄棒の点検
 - ・接合部
 - ・地面、マット
 - ・濡れていないか
 - ・さびていないか

- 安全な指導
 - ・落下を防ぐ
 - ・手の汗を拭う
 - ・頭と首を守る
 - ・補助

(2) 鉄棒運動の基本

- ・握りかた：握り固定技術、握りなおし技術

- ・着地技術
- ・ぶら下がる～振る（懸垂振動）～跳び下りる
- ・跳び上がる～振る（支持振動）～跳び下りる

(3) 逆上がりの実践

○類似性のある運動

- ・つばめ（ツバメ）
- ・ふとん（ふとん干し）
- ・前回り下り
- ・つばめ～後方下り
- ・つばめ～ふとん～前回り下り
- ・つばめ～ふとん～つばめ
- ・補助逆上がり
- ・逆上がり

(4) 逆上がりに繋がる運動

○類似性のある運動

- ・スキップ：脚の使い方
- ・前屈：逆さ感覚
- ・後屈：後方への倒し感覚
- ・担ぎ合い：後方への倒し感覚

3. 鉄棒の授業で気づいたことや感じたこと（調査2）

サブグラフ 01 は、「できる」「思う」「逆上がり」「つばめ」「ふとん」「前回り」「コツ」「教える」「見る」「練習」「学ぶ」の抽出語から構成されている（Figure 3）。このグラフは、出現数の多い抽出語を複数含むことから、対象者の全体的な特徴を表すものと考えられる。

このグラフからは、「逆上がり」が「つばめ」や「ふとん」とどのような関係があるのかについての記述が最も多くみられた。

サブグラフ 03 は、「鉄棒」「子ども」「大切」「行う」「補助」「保育」「安全」の抽出語から構成されている（Figure 3）。このグラフからは、授業での実践経験をもとにした、子どもの鉄棒指導に関する記述が複数みられた。

以上のことから、サブグラフ 01 およびサブグラフ 03 を中心に分析したところ、次の四つの特徴がみられた。

(1) 逆上がりのコツと難しさ

多くの学生が「つばめ」と「ふとん」を中心とした逆上がりの練習に関心を寄せていた。それぞれの運動に類似性があることは理解できた

ようである。（5-1, 5-2, 5-3, 5-4, 5-5）。

「わかる」が「できる」に変わるためには、今できる簡単な運動を繰り返し行い、簡単な運動が「上手にできるようになる」段階が必要である。その段階になると、新たな感覚も生まれてくる。つかみかけた身体感覚を耕すためには、時間を空けずに練習することが有効である。

学生の記述 5-1

逆上がりがずっとできたことがなくて、補助が支えてくれないとできなかったけど、コツはつかめたし、練習したいなと思いました。

学生の記述 5-2

急に逆上がりの練習をやるのではなく、ふとんをしたり、つばめをしたりと段々と怖さをなくしてから行うと良いことを学んだ。

学生の記述 5-3

ふとんはただ曲がるだけと考えていたが、しっかり考えないと骨を痛めてしまうし、つばめは伸びたままを保つのが難しく、そこから前回りに繋げるのは、少し怖かった。

学生の記述 5-4

鉄棒をやる機会はほとんどなく、久々にやったら筋肉痛になりました。つばめとふとんはできたけど、逆上がりは補助がないとできないです。（中略）つばめもふとんも逆上がりをするための類似動作ということがわかりました。私は、幼小の時から順序を踏んで練習したかったなと思いました。

学生の記述 5-5

つばめは、全体を真っすぐに伸ばすのは、難しいと思いました。足の方が下に下がってしまいました。久しぶりに逆上がりをしてみました。前にやっていた時と同じように鉄棒から腕を縮めることができず離れてしまいました。

(2) 子どもの指導

子どもの指導に関する記述は、複数みられたが、概ね、次の二つにまとめることができる。

学生の記述 6-1 には、今回の授業の主な内容である「鉄棒運動の安全」と「逆上がりの練習」

に関することが述べられている。

学生の記述 6-2 は、子どもの目線で、様々なことを感じ取りながら実践していたことがわかる。特に「どうしたら痛くないのか」や「どうしたら怖くないのか」について、自分の実感を頼りにして、実際の指導を考えている。

学生の記述 6-1

つばめやふとんなどの簡単な動きが逆上がりの動きに似ていることが分かりました。慣れていないとふとんや前回りは、子どもにとって怖いと思うので、子どもが恐怖を感じないやり方で教えることが大切だと思いました。鉄棒は使う前に錆がないかや濡れていないかなどをよく点検してから使うことが大切だと分かりました。逆上がりをする前に遊び感覚で鉄棒と触れることで、子どもが親しみやすくなるのではないかと思いました。

学生の記述 6-2

(前略) 少しずつ鉄棒になれる段階(つばめやふとん等)を通すことで、鉄棒は骨盤の下あたりに当ててあげると痛くないことや早く(スピードをつけて)回りすぎると着地の時、勢いがありすぎて怪我をしそうだなとか様々なことを思い出したり、気づいたりして子どもの頃に戻ったような感覚になりました。また、自分自身が少し大人になって、鉄棒に少し恐怖心を持った状態で今回の授業に参加したことで、初めて鉄棒に挑戦する子どもの心境や感覚を理解できたような気がしました。初めてだから当然、鉄棒を掴んで上がることも行ったことことがないし、回るなんてと腰が引けてしまう思いだと思います。子どもたちに、鉄棒はこんなに面白いんだよ、こんなに楽しいんだよと伝えるために、まず保育者自身が子どもたちの前で堂々と鉄棒を行なっている姿を見せたりすることが大切だと感じました。(後略)

(3) 鉄棒が得意な学生の気づき

学生の記述 7-1 には「力づくで回るのではなく、足の勢いで回る」とある。授業では、逆上りのコツとして「力は脚の動きでつくり、上体は締めておく」と説明したが、その意味を実体験として理解したようである。

学生の記述 7-2 のように、鉄棒を得意とする学生の中にも、逆上りの基本を知らない者がいた。逆手と順手の使い分けを形としてではなく、機能として理解できたようである。また、鉄棒運動の実践から、身体の変化に気づき、自分の身体を見直す機会にもなっている。

学生の記述 7-3 は、鉄棒の運動学習教材として価値を総合的に気づいたものとなっている。また、「抑えつつ取り組む」は、指導者となった時に重要な視点である。鉄棒は、小さな力でも大きな動きに繋がるため危険を伴う運動である。安全管理上のポイントも理解した記述となっている。

学生の記述 7-1

逆上がりを子どもに教える時は、やり方を教えるのではなく、つばめやふとん、ぶら下がりなど逆上がりに繋がる技を行うといいのだと分かった。力づくで回るのではなく、足の勢いで回るのが大切だと学べた。

学生の記述 7-2

(前略) 今までは、逆上がりをする時、逆手でやって回ったらすぐに着地していたけれど、逆上がりは、順手で回ったらつばめの形に繋げる技であるということを知った。小さい時にやっていた時よりも、自分の身体が思うような動きができていなかったり、重く感じた。どの運動も続けて行わないと維持できずに衰退していく一方だと感じた。

学生の記述 7-3

鉄棒は、全身の動きを使うので、身体の動かし方や力の使い方も学ぶことができる重要な運動だと思った。また、楽しみながら腕の筋力をつけることができるので、子どもにとって良い環境であると思った。一つの鉄棒でも手や腹で支持したり、ぶら下がったり、揺れたり、回転したり様々な動きをして楽しめるところが、鉄棒の良いところだと改めて思った。一つ一つの動作にポイントがあるが、安全かつ適切な動きをする為に、抑えつつ取り組む必要があるのだと気がついた。

(4) 独自性のある気づき

今回の調査では、鉄棒運動のコツについて、

独自性のある記述もみられた。

学生の記述 8-1 には、「シーソーみたいな原理」という記述がある。この学生は、今回の授業でつばめを学習し、腹部の痛みを軽減することができた。痛みから解放された余裕が、自分の動きの観察に結びついたと思われる。このような発見は、当然ながら、シーソーの経験がないと思ひ浮かばない。新しい運動に取り組む時は、過去の運動経験が頼りになる。

学生の記述 8-2 には、「スッと回るだけで」という記述がある。この表現は、その後「腕の力にまかせて前までは回ろうとしていた」「足と軽さ（しなやかさ）」と述べていることから、脚の動かし方に関してつかんだ新しい感覚を、言語で表したものと思われる。このような動きの言語化は、動きの全体像をつかむことに役立つ。

学生の記述 8-3 では、「逆上がりの踏み込む足の位置とボールを蹴る時に踏み込む足の共通点」について述べている。このケースは、前述のシーソーと同様に、過去の運動経験をもとにした発見といえる。このような運動の類似性への気づきは、体育授業の中で重要な内容である。

学生の記述 8-1

いつも腹に棒を当てていた為痛いと感じていたが、位置をずらす事により痛さが減ると感じた。つばめからふとん、ふとんからつばめに戻る時にシーソーみたいな原理があると感じた。

学生の記述 8-2

逆上がりがずっとできたことがなくて、補助が支えてくれないとできなかったけど、コツはつかめたとし、練習したいなと思いました。足を反対側まで回せば、後は軽くスッと回るだけでいいんだと少し気持ち的にも身体的にも理解することができました。腕の力にまかせて前までは回ろうとしていたので、足と軽さ（しなやかさ）が重要だと気づきました。（後略）

学生の記述 8-3

今回の授業で逆上がりをやってみて、サッカーとの関連性まで理解し、回る感覚もつかめたのでよかったです。逆上がりの踏み込む

足の位置とボールを蹴る時に踏み込む足の共通点を意識して、足をしっかりと振り上げることが大切だと思った。（後略）

V. おわりに

本研究では、保育学生の体育授業の在り方について、鉄棒の歴史と授業実践から考察した。

鉄棒の歴史は、「器械運動」としての「鉄棒」の誕生と日本への導入について、先行研究の成果を基に、1) 欧州における「器械運動」の誕生と拡大、2) 「器械運動」の日本への導入と展開の概観から整理した。

洋の東西を問わず、「遊び」として楽しみの要素が強い活動であった「鉄棒」運動は、やがて中等教育における身体訓練として本格的に教育に導入され、そののち「遊び」から「訓練」を繋ぐ期間も段階的に学校教育においておこなわれるようになってきたことが確認できた。

授業実践は、まず、対象学生の鉄棒で遊んだ思い出や授業への希望を調査、分析し、授業内容を考案した。これまでは、前年までの授業実践をもとに授業内容を考案していたが、それに加え、対象学生の生の声を反映することができた。

授業後の授業ノートの記述からは、第一弾⁴⁶⁾と同様に、授業者が授業中に直接観察できなかった学生の気づいたことや感じたことについて、受講学生全体の特徴や課題を見出すことができた。

多くの学生が「つばめ」と「ふとん」を中心とした逆上がりの練習方法に関心を寄せており、運動の類似性について考える機会となった。

今後の課題として三つあげることができる。一つ目は、1950年代以降の学習指導要領の中で「鉄棒」がどのように扱われてきたのかを整理すること、二つ目は、授業実践前の事前調査を鉄棒以外の運動種目でも実施すること、三つ目は、各運動種目の技能向上に繋がる類似性のある運動を整理することである。

（高橋裕勝）

【謝辞】

本研究の実施にあたり、調査にご協力を頂きました本学学生の皆さんに、記して謝意を表します。

【文献】

- 1) 高橋・永井 (2022) 保育学生の体育授業を考える縄跳びの歴史と授業実践から 帝京短期大学紀要, 23, 39-54
- 2) 科学研究費助成事業 研究成果報告書 平成30年6月21日現在 幼児の運動能力の現状と運動発達促進のための運動指導及び家庭環境に関する研究 研究代表者 森司朗 Retrieved from https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-15H03072/15H03072_seika.pdf (2021年11月7日)
- 3) 川上・増田・竹内 (2017) 保育者養成のための身体を動かす授業を考える 1 保育学生の体力・運動能力調査に関する先行研究の把握 武蔵野教育學論集, 1, 21-31
- 4) 飯田・黒田・松本 (2021) 保育者の幼児への運動遊び指導に対する意識と運動能力・知識の関係 保健の科学, 63(4), 281-285
- 5) 例えば, ㈱ザナックス『スポーツ体育用品カタログ2020』1118 - 1119 記載の低鉄棒, 高鉄棒など。
- 6) 岡端隆 (1995) 学校体育における器械運動の特性に関する一考察 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第26号 179 - 190, 三橋綾子 鉄棒の歴史および特性と効果について 玉川学園・玉川大学 健康・スポーツ科学研究紀要 第17号 23 - 27 など
- 7) 「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編」文部科学省 2018年2月
- 8) 岡端隆 (1995) 学校体育における器械運動の特性に関する一考察 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第26号 182
- 9) 前掲7) ほか。
- 10) 三橋綾子 鉄棒の歴史および特性と効果について 玉川学園・玉川大学 健康・スポーツ科学研究紀要 第17号 24
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 笹川スポーツ財団ホームページ記事 佐野慎輔 (2017) 5. 日本にスポーツはなかったのか... 2022年8月24日 閲覧
- 14) 葛飾北斎『北斎漫画 復刻版』2017 株式会社東京美術 469
底本: 文政元年正月刊行 角丸屋甚助版
- 15) 前掲10)
- 16) 前掲10)
- 17) 前掲10)
- 18) 竹之下休蔵, 岸野雄三共著『近代日本学校体育史』1983年2月 日本図書センター (底本 1959年7月 東洋館出版社) 12
- 19) 同上 22
- 20) 同上 26
- 21) 同上 36
- 22) 同上 46
- 23) 同上 55
- 24) 同上 56
- 25) 同上 148
- 26) 同上 148
- 27) 同上 159
- 28) 同上 159
- 29) 同上 196
- 30) 「小学校学習指導要領体育編」昭和24年 文部省
- 31) 同上
- 32) 同上
- 33) Retrieved from <https://e-words.jp/w/ テキストマイニング.html> (2022年10月31日)
- 34) 樋口耕一 (2017) 計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望 社会学評論, 68(3), 334-350
- 35) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 体育編
- 36) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編
- 37) 菊池秀範著 (1995) 幼児期の運動遊びの指導と援助 萌文書林 pp. 17-53
- 38) 前掲35) p65
- 39) 前掲35) p44
- 40) 前掲39)
- 41) 前掲36) pp.47-48
- 42) 前掲36) pp82-84
- 43) 前掲36) pp126-128
- 44) 吉田茂・三木四郎編 (1996) 教師のための運動学 金子明友監修 大修館書店 pp. 187-195
- 45) 前掲37)
- 46) 前掲1)

Physical education classes for childcare students

—Through the history of Bars and classroom practice—

Hirokatsu TAKAHASHI • Rieko NAGAI

Department of Early childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 This paper is the second in a series of studies of physical education classes for child care students at a training school for child care providers. It has been reported that caregivers with a high awareness of physical activity instruction are confident in their physical activity abilities. As the author in charge of physical education at a nursery school, it is my experience that there are many childcare students who lack confidence in their athletic ability. It is necessary to give sufficient consideration to what and how to study in physical education-related classes. Therefore, the purpose of this study is to analyze the students' free writing answers obtained from a preliminary survey and the students' class notes to find out the characteristics and issues of the students as a whole. In addition, this time, the research will focus on the class practice of the bars, and will also organize the history of the bars from a macroscopic viewpoint.

【Methods】 The history of the bars was organized based on the results of previous studies on the birth of the bars as an gymnastics and its introduction to Japan. The class practices were analyzed and qualitatively interpreted using KH Coder3 based on the students' free writing responses obtained from the preliminary survey and the students' class notes.

【Results】 The history of the bar is summarized from an overview of the birth and expansion of gymnastics in Europe and the introduction and development of gymnastics in Japan. The preliminary survey of the class practice revealed the following: 1) practice of breech with aids, 2) play of children who were not good at the bars, 3) play of children who were good at the bars, and 4) hopes for the class. From the students' class notes, we were able to find 1) tips and difficulties of pullover, 2) children's guidance, 3) notices of students who were good at the bars, and 4) unique notices.

【Discussion/Conclusion】 Iron bars, which had been an activity with a strong element of fun as play since ancient times, were eventually introduced into education in earnest as physical training in secondary education, and later on, the period connecting play and training came to be used in school education in stages. In the class practice, we were able to reflect the real voices of the target students in the class content based on the preliminary survey. From the class notes, as in the first study, we were able to identify the characteristics and issues of the students as a whole in terms of what they noticed and felt, which we were not able to observe directly during the class. Many students were particularly interested in how to practice the pullover, providing an opportunity to reflect on movement resemblance. Three issues can be raised for the future. The first is to organize how bar has been treated in the Courses of Study since the 1950s. The second is to conduct a preliminary survey on classes in other sports than bar, and the third is to organize resemblance movement that lead to skill improvement in each sports category.

【Key words】 childcare students, physical education, class notes, preliminary survey, movement resemblance, bars as an gymnastics